【研究論文】

教職・保育職を志望する学生の歌を用いた英語の発音上達と英語の自信の変化について

宮腰　宏美*

要　旨

本研究は、教職・保育職を志望する学生に、/ l /、/ r /、/ ð /、/ θ /、/ s /、/ v /、/ f /、/ t /、/ p /の発音方法を継続的に教えるとともに、英語の歌を使いアウトプットを行なうことで、授業開始当初英語自体にマイナスイメージをもっていた学生の英語への印象の変化、英語の発音および英語自体への自信の変化を明らかにすることを目的としている。英語の発音および歌の練習を繰り返し行った結果、英語の発音への自信および英語自体への自信が上昇したとともに、学生の英語自体への印象がポジティブに変化したことが認められた。今後の課題として、英語の文章として自然なアウトプットができるよう、朗読劇等を用いることにより、学生の意欲を高めながら学習できる方法を模索するとともに、小学校教諭を目指す学生に対して英語の発音指導を行なうことで、現場指導を目標とした学生の英語への自信増加の方法を模索していきたいと考える。

キーワード：英語、発音、英語教育

Ⅰ．研究の背景と目的

小学校英語教育は大きな転換期を迎えようとしている。

2020 年の学習指導要領全面実施に伴い、小学校 5、6年生では英語が教科として週2回、年間70時間程、3、4 年生で年間 35 時間程の外国語活動が行なわれることとなった（文部科学省,2017;足立,2018）。外国語活動として始まった小学校での英語教育は、ゲームや歌等を使い、楽しく英語に触れることにより中学校からの英語嫌いをなくす目的も含んでいた。しかし今回の改訂により何も分からない子供たちが、あまり自信のない先生から中学生レベルの英語を習うことで、中学に進む頃には英語嫌いになっている児童が今より増える懸念があると鳥飼氏は警鐘を鳴らしている（鳥飼,2016）。文部科学省から出された現英語教材である Let’s try! や We Can! からは、前英語教材である 5、6 年生向けの Hi friends!より遥かに難しい内容記載されているという印象を筆者は受けた。小学校での英語授業が難しくなるに伴い、東京学芸大学の「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」（2017）には、現小学校教員に求められる英語能力として、英検 2 級程度を挙げており、特にこれから教員となる大学生等の養成段階において目標とする英語力の指標としても示されている。同資料には、小学校教員が英語を教える上での資質能力の一つとして、発音や強勢・リズム・イントネーションを意識した発話能力が挙げられている（伊藤,2018）。しかし、2010 年にベネッセが行なった小学校における英語活動に対する意識調査には、小学校教員は外国語活動の授業に自信がなく、教員の英語力を課題と感じていることが明らかにされている。更に、英語研修に関して現職の小学校教員は、英語力の向上やクラスルームイングリッシュに関すること等を行なってほしいと感じていることも明らかになっている(2011,ベネッセ)。一方で、保護者は外国語活動を通し児童が英語に対する抵抗感をなくし、英語の音やリズムに慣れ、聞いたり話したりすることができるようになることを期待していることが分かっている他、教員の指導力不足に不安を感じていることも報告されている(ベネッセ,2006:名畑目,2014)。したがって、今後小学校教員となる大学生

*岡崎女子大学

を養成していく上で、英語力では特に発音の向上および自信をつけさせることが大切であると考えられる。

本研究は、岡崎女子大学子ども教育学部の学生を対象に行なう。学生は主に小学校教諭、幼稚園教諭、保育職を目指す学生であり、特に英語が好き、英語ができるというわけではない。学生が指導者となった際に、少しでも自信をもって英語を使えるようになるためには、今もっている英語への自信をより大きくする必要がある。本研究では、教育職や保育職を目指す学生が歌を使い英語の発音を矯正することで、発音に自信をもち、自身の英語自体の自信につながるかについて研究する。

Ⅱ．先行研究のレビュー

１．英語授業への自信について

国立教育政策研究所が 2015 年度から 2016 年に行なったアンケートには、自信を持って指導している小学校教員は全体の 34%で、英語が苦手であると感じながら授業をしている者が 67%いると述べられている(国立教育政策研究所,2016)。また、2018 年度に山内と作井が行なった調査では、現職小学校教員の英語の 4 領域（読む・書く・聞く・話す）における自己評価調査の結果、全ての領域で底上げが必要であると考察している。更に、大学生の英語の自己評価について足立が 2018 年に行なった調査には、小学校教員養成課程の大学生は、大学で授業を受けた後でも外国語活動・英語活動に対して不安が残るという結果を明らかにしている。特に英語の発音に対する不安が大きく、その原因としては、短い期間だけで論理的に授業を通して発音の勉強を行なっても身に付かないからという意見が多かったと述べられている（足立,2018）。同じように、2014 年に小学校教員を志望する大学生を対象に名畑目が行なったアンケート調査の結果には、小学校教員を志望する現役大学生は小学校における英語活動の実践を楽しみに感じてはいるが、大きな不安も抱いていると述べられていた。また、学生たちは、英語でのコミュニケーション能力、スピーキング能力および発音が重要であると考えていることが示された他、英語 4 技能（読む・書く・聞く・話す）の向上および発音を学ぶことを強く望んでいることが述べられている (名畑目、2014)。木原(2017)は、2014 年に小学校教員志望の学生 100 名に対しアンケート調査を行なった結果、学生たちが英語を教えるにあたり不安に感じていることは、英語の力が不足と発音に自信がないことが述べられている。木原は、これら苦手意識の克服、特に発音の克服が英語を話す自信および英語を教える自信につながると論じている（木原,2017）。俣野(2017)は、現職小学校教員の英語音声にかかる知識不足が不安につながっているということを発見し、英語発音に関するワークショップを行なったところ、英語力や指導力が向上したという結果が出たことを明らかにしている。

２．発音指導について

足立（2018）の調査によると、2017 年に東と小川が子ども向けの市販のプログラムを、DVD を使用して大学生に視聴させた例や、2016 年に田辺がウェブによる学習、英語カフェ、模擬留学、短期留学による学習を行なった例を挙げている。田辺の研究の結果では、英語に対する不安が若干軽減され、最も効果が高かったのは模擬留学（英語合宿）と海外研修であったことが述べられている（足立、2018）。足立（2017）は、オイリュトミーを活用し、英語の音をジェスチャーを通して体全体で体験するプログラムを行なった。中内田と大嶋は、2017 年にフォニックスの学習を通して、英語の発音の練習を行なったところ、90％近い学生に効果が現れたとある。牧野は 2013 年に、英語の歌によって発音の練習を行なった。学生のアンケート結果には、英語の歌を歌うことは発音練習のために良いと実感していることが述べられている(牧野,2013)。また、牧野は、手鏡を使って自分の口の形を見たり、携帯カメラで自分の発音の仕方を撮影したりすることで、自分の発音方法を自己評価しながら行なう方法を試している。松浦(2015)は、座席順にコンマ・ピリオドで交替しながら読み進める「分かち読み」を使い、発声を通して英語の発音を練習するやり方を行なった。植松(2017)は、「割り箸」を使って口の中のどの部分を舌で使うか、丸めるか、また唇の噛み方を指導することを通して発音の練習を行なっている。

３．日本人の特徴的な英語の発音について

日本人の特徴的な英語の発音について、Greer (2004)は、多くの日本人の生徒は母国語に存在しない言葉を発音することに問題があり、特に/ r /と/ l /の違いは最も顕著な例の 1 つであると述べている。Howng と Sato(2015)は、日本人には、/ v /、/ l /、/ r /、/ θ /についての子音の発音に典型的な問題があると述べている。Hrysyzen(2015)は、日本人学習者は、/ r

/と/l/を置換して発音し、/v/音は日本語の音として存在しないため、/b/の発音に置き換えることがよくあると論じている。Utsunomiya & Yoshimura (2015)は、多くの英語の音素は日本語で存在せず、/l/や/r/、/s/、/ʃ/、/θ/などの音素の発音に困難があると述べている。菅井（2004）は、日本人学習者にとって、/r/と/l/が、/b/と/v/、/s/と/θ/の区別より難しいということを述べている他、/r/と/l/、/v/と/b/、/s/と/θ/は聞き分けが困難である典型的な例であると論じている。津熊（2005）は、英語の音を日本人が聞いた時に混乱する子音の種類として、/r/、/l/、/f/、/v/、/θ/、/ð/等を挙げている。竹蓋（1981）が行なった実験では/s/、/z/の音は、日本人の耳には、それぞれ/t/、/d/に近い音に聴こえるということが判明したと記されている。また、/v/が/b/に、/f/が/h/に、/r/が/l/に近いと日本人には聴こえることも明らかになったと述べられている(Takebayashi,1970)。

４．歌を使った英語の発音矯正について

Engh(2013)は、英語学習の為の音楽と歌の使用は新しいものではなく、1962年からBartleにより研究が始まっていたと述べている。そういった数々の海外の研究結果の例の1つとして、Stanculea(2015)は、歌は様々な発音を練習する為に使うことができる他、英語の言葉の練習やスピーチの練習にも使用することができると述べている。Yang(2011)は、音楽と言語習得との関係について行なわれたほとんどの研究が、音楽を通して英語を教えることには多く学びがあるという結論を導いており、英語教育で音楽を使用することは、新しい方法論ではなく、言語習得を容易にするための強力なツールであると論じている。大学の授業における英語の歌の使用について Shen (2009)は、授業自体の効果を高めたり強めたりすることができると述べている。Setia, Rahim, Nair, Husin, Sabapathy & Mohamad(2012) は、歌の授業での使用は、英語への理解を助けるだけでなく、英語学習のへ興味を刺激し、高めることができる上、学生の英語への自信や学習効果を高めることができると記している。しかし、授業中に音楽を使用すると、曲によっては、授業が乱れる場合がある為、使用する歌を正しく選択することが指導を成功させるためには不可欠であると注意している（Yang,2011)。Tuan(2010)は、歌は、言語学習を目的としている者だけでなく、学習者全体の身体的および精神的発達を支援する最も価値のある教育ツールとなり、特に幼児には効果が大きいと述べている。

日本では特に牧野(2013)が英語の歌に関する研究をしており、英語の歌の上達には、英語独自のリズムや音のつながりなどの理解が必要であるが、楽しみながら練習することができる利点があると述べており、日本の学生にも歌を使った英語の上達は見込まれるという結果を出している。

Ⅲ．対象と方法

１．調査対象

調査対象は、岡崎女子大学子ども教育学部子ども教育学科1年生英語Ⅰ受講者37名であった。調査期間は平成31年4月〜7月の4ヶ月間で、研究方法として、質問紙調査を用いた。

調査内容は、(1)将来希望職種について、(2)英語への印象について、(3)英語への自信について、(4)英語の発音への自信について、(5)英語の歌は好きですか？(6)英語の発音を上達させたいですか？(7)自由記述の7項目であった。質問調査項目について、岡崎女子大学・短期大学研究倫理委員会にて審査の上承認をうけた。質問紙調査を始める前に、改めて本研究の目的を伝え、調査の協力および本研究の論文化と内容公開について同意を得た。

質問紙調査は、授業開始時（2回目）、授業終了時(14 回目)に調査を行ない、その差について比較検討した。

２．実験方法

本研究では、/l/、/r/、/ð/、/θ/、/s/、/v/、/f/、/t/、/p/の音について、学生が10回の授業を通して正しい発音を理解し発音ができるようになるよう、1回の授業で1つの音の練習を行なった。一度習った発音は、次の週も繰り返し練習することで、/l/や/r/については10週間繰り返し練習を行なうことができた。発音の確認をする為に、L の発音の際には割り箸、R の発音の際には糸を用いて自己の舌の位置を確認し、正しい舌、口の使い方を確認した。

表 1. 発音練習スケジュール

		新しく習った発音の種類	方法
1	第３週	/ l /	画像、模範、割り箸
2	第４週	/ r /	画像、模範、糸
3	第５週	/ ð /	画像、模範
4	第６週	/ θ /	画像、模範
5	第７週	/ v /	画像、模範
6	第９週	/ f /	画像、模範
7	第10週	/ t /	画像、模範
8	第11週	/ p /	画像、模範 ティッシュペーパー
9	第12週	/ s /	画像、模範
10	第13週	なし	画像、模範

３．発音矯正方法について

ビジュアルや模倣を用いて発音の仕方を教えるだけでなく、特に発音が困難である /r/や/l/については、割り箸や糸を使い舌の位置や口の形などを確認した。/r/の発音は舌で糸を引くことができるかどうか、/ r /の口の形ができているかどうかの確認を行なった。/l/は割り箸を前歯の裏に当てることで、発音をする際に舌を当てる場所を確認した。発音学習後のアウトプットとして、単語の発音練習と歌の練習を行なった。本学学生は、保育者、教育者を目指している学生であることから、子ども向けの歌の一つであるドレミの歌およびエーデルワイスを選択した。日本語では既に歌うことができる歌を、英語で単に歌うのではなく発音に気をつけて歌うことで、本来発音を苦手と考える学生も歌を用いて楽しく発音を練習することができると考えた。

Ⅳ．調査結果

１．分析方法

質問項目６項目について、スケールを４つに分け、1～4 点と得点を付与した。平均値および標準偏差を算出したところ、全ての項目で分散が等しくないという結果が出た為、分散が等しくないと仮定した 2 標本による t 検定を行なった。

２．質問項目ごとの回答結果（n=37）

２－１．将来希望職種について

授業開始時（2 回目）の将来希望職種は、保育士が 51%、幼稚園教諭が 33%、小学校教諭が 9%、まだ決めていないが 7%であった。授業終了時(14 回目)には、保育士が 61%、幼稚園教諭が 19%、小学校教諭が 11%、まだ決めていないが 9%であった。

表2. 将来の希望職種について

(%)

	保育士	幼稚園教諭	小学校教諭	未定
授業開始時	51	33	9	7
授業終了時	61	19	11	9

２－２．英語への印象について

授業終了時の英語への印象は、授業開始時に比べ好きが 10%、まあ好きが 29%増加し、あまり好きではないが 19%、嫌いが 22%減少したとともに、有意な差が見られた。

表2. 英語への印象について

(%)

	好き	まあ好き	あまり好きではない	嫌い
授業開始時	14	22	43	22
授業終了時	24	51	24	0

表3. 英語への印象について、
分散が等しくないと仮定した2標本によるt検定

	授業開始時	授業終了時	
平均	2.72972973	2	
分散	0.924924925	0.5	
観測数	37	37	
t	3.718492505		
P(T<=t) 両側	0.00041563	有意差あり	P<0.05
t 境界値 両側	1.996564419		

２－３．英語への自信について

授業終了時の英語への自信は、授業開始時に比べ自信はまああるが 5%、あまり自信はないが 35%増え、自信はないが 40%減少したとともに、有意な差が見られた。

表4. 英語への自信について

(%)

	自信がある	自信はまあある	あまり自信はない	自信はない
授業開始時	0	0	30	70
授業終了時	0	5	65	30

表5. 英語への自信について、
分散が等しくないと仮定した2標本によるt検定

	授業開始時	授業終了時	
平均	3.702702703	3.243243243	
分散	0.214714715	0.3003003	
観測数	37	37	
t	3.894378096		
P(T<=t) 両側	0.000222417	有意差あり	P<0.05
t 境界値 両側	1.994437112		

２－４．英語の発音への自信について

授業終了時の英語の発音への印象は、授業開始時から自信はまああるが 11%、あまり自信がないが 27%増加し、自信があるが 3%、自信がないが 35%減少したとともに、有意な差が見られた。

表6. 英語への自信について

(%)

	自信がある	自信はまあある	あまり自信はない	自信はない
授業開始時	3	8	27	62
授業終了時	0	19	57	27

表7. 英語の発音への自信について、
分散が等しくないと仮定した2標本によるt検定

	授業開始時	授業終了時	
平均	3.486486486	3.081081081	
分散	0.59009009	0.465465465	
観測数	37	37	
t	2.400213362		
P(T<=t) 両側	0.01900995	有意差あり	P<0.05
t 境界値 両側	1.993943368		

２－５．英語の歌への印象について

英語の歌への印象は、授業開始時から 31%増加し、まあ好きが 29%減少した。あまり好きではない の増減はなく、嫌いは 0%のままであったとともに、有意な差は見られなかった。

表8. 英語の歌への印象について

(%)

	好き	まあ好き	あまり好きではない	嫌い
授業開始時	37	51	11	0
授業終了時	68	22	11	0

表9. 英語の歌への印象について、
分散が等しくないと仮定した2標本によるt検定

	授業開始時	授業終了時	
平均	1.7297297	1.4324324	
分散	0.4249249	0.4744745	
観測数	37	37	
t	1.9068456		
P(T<=t) 両側	0.0605308	有意差なし	P<0.05
t 境界値 両側	1.9934636		

２－６．英語上達に関する意欲について

授業終了時の英語上達に関する意欲は、授業開始時から上達させたいが 8%増加し 100%となり、上達させたいと思わないが 8%減少し 0%となった。

表10. 英語上達に関する意欲　　（%）

	上達させたい	上達させたいと思わない
授業開始時	92	8
授業終了時	100	0

Ⅴ．考察

本研究では、特に英語が好き、英語ができるというわけではない、教職・保育職を目指す学生が英語の歌を使って発音を上達することで、発音に自信をもち、英語自体への自信につながるかどうかを検証することを目的として調査を行なった。発音練習として、/ l /、/ r /、/ ð /、/ θ /、/ s /、/ v /、/ f /、/ t /、/ p /の音について、1 回の授業につき 1 つの音を新たに習うという取り組みをし、一度習った発音は、次の週以降も繰り返し練習し、最大で 10 週間同じ発音を練習した。発音練習のアウトプットとして、サウンド・オブ・ミュージックのドレミの歌とエーデルワイスを用いた。

英語への印象は、授業開始時には嫌い、あまり好きではないというネガティブ回答が 65%であったのが、授業終了時には、好き、まあ好きというポジティブ回答が授業終了時には 75%になり、学生の英語への印象が良い方向に変化したと考えられる。アンケート自由記述には、「大学に入って英語の授業が楽しくなりました」、「高校の時より楽しい」、「最初は全然好きじゃなかったけど、（中略）好きになりました。英語の歌もっと歌いたいです」、「とても楽しく英語を勉強することができました。今までよりより好きになりました」という、英語に対する気持ちのポジティブな変化が表れた記述が散見された。

英語への自信については、授業開始時からあまり自信はない、自信はない、あまり自信はない というネガティブな回答が 100%、また終了時にも 95%を占めているが、ネガティブ回答の中でも 自信はないが開始時から 40%減少したことから、自信はない中にも多少ポジティブな変化が生じていることが考えられる。アンケート自由記述には、「授業が楽しいので前より苦手意識が減りました」、「高校の時に英語に対する苦手意識が大きくなり、あまり自信がなかったけど、大学の英語で歌を歌ったりすることで英語への苦手意識が少しずつなくなってきました」、「好きと得意はちがうので、得意になりたいと思います」など、苦手意識の克服や得意になりたいという気持ちの変化が見られた。

英語の発音への印象は、授業開始時に自信がある、自信はまあるが 11%から 19%に増加し、あまり自信はない、自信はないが、89%から 81%に減少した。ネガティブ回答の中では、自信はないが、62%から 27%に減少し、あまり自信はないが 27%から 57%に増加したことから、発音について理解ができたことで、自信がないながらも多少自信がついたことが考えられる。アンケート自由記述からは、「この授業で発音がよくなった」、「今までの英語の授業は発音についてあまり触れてなかったので、とても楽しく学べました」、「今まであまり発音をやったことがなかったけれど、たくさんやることができて楽しかったです」、「楽しかったです。歌で発音がよく分かってよかったです」など、英語の発音の理解、発音への自信の変化などに関する記述が見られた。

英語の歌への印象は、授業開始時から嫌いであるまたはあまり好きではないと感じている学生が少なく、元々英語の歌への印象が良い学生への歌の導入となったことが今回の調査でポジティブな結果をもたらしているひとつの要因と考えられる。アンケート自由記述には、「歌などを通して英語の発音の仕方が分かってきたので良かったです」、「歌もあって楽しかったです。発音の練習が出来て良かったです」など、歌を使用したことにより意欲的に発音の練習ができた旨の記述が見られた。

英語上達に関する意欲については、授業終了時には 100%となった。歌を使用したことで英語が楽しいと感じたことにより、英語に対する意識がポジティブに変化し今後への英語上達への意欲へつながったのではないかと考えられる。

Ⅵ．まとめと今後の課題

本研究では、サンプル数が 37 と少人数ではあるが、発音を練習したのちアウトプットとして歌を使用することで、学生が英語に対してポジティブな印象をもつ他、英語および英語の発音に関する自信がポジティブな方向へ変化することが明らかになった。今回は、音階やリズムがある歌を使用したため、文章としてのナチュラルなアウトプットを行なうことができなかった。今後の課題として、劇を用いることにより文章として自然なアウトプットを行うととも

に学生の意欲向上ができないかを検証したい。また、学生のアンケート自由記述に「(省略) 授業を受けて英語を話したいととても思うようになりました」という意見があったことから、劇の台詞練習を行なうことで、英語を話す意欲にもつなげることができればと考える。今回の研究では、対象者が教職を目指す学生が全体の 10%程度しか占めていなかった。今後の課題の 2 つ目として、小学校教諭を目指す学生に対して英語の発音指導を行なうことで、より実践を目標とした学生たちが現場で自信をもって教えることができるようになるような取り組みを行なっていきたいと考える。

付記

本研究は、平成 31 年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査の承認（承認番号 03）を受けて実施している。

参考文献

・足立 望(2017).「大学教職課程におけるコアカリキュラムについての実践研究」『岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要』16 号, pp.161-170.

・足立 望(2018).「大学教職課程における「小学校における外国語・英語科に関する専門的事項」 についての研究: 児童文学, ゲームや仕草を利用して大学生が英語を話す自信を向上させる」『岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要』17 号, pp.305-312.

・植松 大介(2017).「地域振興と連携を目指した講義プログラムの試み 大学の開放授業講座(リカレント教育)を通して英語講義展開」『武蔵丘短期大学紀要』24 号, pp.61-63.

・国立教育政策研究所 (2016).「小学校英語教育に関する調査研究[平成 27 ～ 28 年度]」 http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-4-1_a.pdf (2018.12.15 アクセス)

・菅井 康祐(2004).「日本人 EFL 学習者の英語子音の知覚について―語頭子音の知覚の難易度に関する実験」『外国語教育フォーラム』3 号, pp.17-22.

・竹蓋 幸夫(1981).「日本人大学生の米語音聴取にみる 'Acquired Similarity' と 'Acquired Distinctiveness' 子音間距離知覚実験による観察」『Language Laboratory』18 号, pp.11-28.

・津熊 良政(2005).「日本人英語初級学習者のための英語音声指導」『立命館大学紀要別冊号岩夫先生退職記念論集 ことばとそのひろがり』3 号, pp.163-200.

・東京学芸大学(2017).文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」. 平成 28 年度報告書.

・鳥飼玖美子(2017).『英語教育の危機』.筑摩書房.

・中内田 陽子・大嶋 秀樹 (2017).「効果的なフォニックス指導の一考察−小学校におけるフォニックスの必要性−」『滋賀大学教育学部紀要』 67 号, pp.21-31.

・名畑目 真吾(2014). 「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」『小学校英語教育学会誌』14 号, pp.131-146.

・ベネッセ教育研究開発センター(2011).『第 2 回小学校英語に関する基本調査（教員調査）』 http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html (2018.12.04 アクセス)

・ベネッセ教育研究開発センター(2007).『第 1 回小学校英語に関する基本調査（保護者調査）』 http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/hogosya/index.html (2018.12.04 アクセス)

・牧野 眞貴(2013).「学生が効果的に感じる英語発音トレーニングの実践報告」『外国語教育フォーラム』12 号, pp.121-134.

・俣野 知里(2017). 「学級担任の英語力向上を図る校内研修の検討」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』8 号, pp.35-44.

・松浦 千佳子 (2015). 「英語で表現する」『New Directions』 33 号, pp.79-87.

・文部科学省(2017).「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業等」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2017/05/16/1384980_010.pdf (2018.11.30 アクセス)

・山内 啓子・作井 恵子 (2018) 「技能からみる小学校教員の英語力:自己評価を通して」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 文学部篇』7 号, pp.23-39.

・Engh, D. (2013). Why use music in English language learning? A survey of the Literature, English Language Teaching,.6, (2), pp.113-127.

・Greer Tim (2004). A Quick Way to Improve /r/ and /l/ Pronunciation, The Internet TESL Journal, 10, (8), http://iteslj.org/Techniques/Greer-Pronunciation_of_LR.html (accessed November 30, 2018).

・Howng, Kung-Cheen., & Sato, Kento. (2015). A Japanese College Student’s Acquisition of /r/ and /l/, Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, .97, pp.11-16.
・Hrysyzen, Katherine. (2015). Raising Conscious Awareness in the Physical Articulation of /l/ and /r/, Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 97, pp.28-34.
・Setia, R., Rahim, RA., Nair, GKS., Husin, N., Sabapathy, E.,&Mohamad, R. (2012). English songs as means of aiding students’ proficiency development. Asian Social Science, 7, pp.270-274.
・Shen, C. (2009). Using English songs: An enjoyable and effective approach to ELT. English,Language Teaching, 2, (1), pp.88-94.)
・Stanculea, A. N., & Bran, C. N. (2015). Teaching Pronunciation through songs. Journal Plus Education, 12, (2). pp.177-184.
・Takebayashi,Shigeru. (1970). A Comparative Study of Japanese and English Consonat Phonemes, Essays in Honor of Claude M. Wise. Hannival, Missouri, pp.97-144.
・Tuan,L.T.,&An,P.T.V.(2010).Teaching English rhythm by using songs.Studies in Literature and Language, 1, (2), pp.3-29.
・Utsunomiya, Tomomi., & Yoshimuta, Satomi. (2015). Japanese Phoneme /ɕi/ as a Foundation for /si/, /Θi/, and /ʃi/ in English.Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 97. pp.44-54.
・Yang, Liu.(2011). Using Music in English as a Second Language Classroom. University of Wisconsin-Platteville.